Factors affecting activity restriction associated with fear of falling in elderly Japanese

メタデータ	言語: eng
	出版者:
	公開日: 2017-10-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 能村, 友紀, Nomura, Tomonori
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19518

平成 20 年 2 月 20 日

博士論文審査結果報告書

学位授与番号　医博甲第 1956 号

学籍番号

氏　名　能村 友紀

論文審査員

主　査（職名）　生田宗博（教授）

副　査（職名）　能登谷晶子（教授）

副　査（職名）　染矢富士子（教授）

論文題名　Factors affecting activity restriction associated with fear of falling in elderly Japanese（地域高齢者の転倒恐怖感による活動制限に影響を及ぼす要因）

論文審査結果

転倒恐怖感とは，転倒に関する日常生活動作を転ばずにやり遂げる自信が低下した状態と定義され，高齢者が転倒恐怖感を持つことは実際には能力があるにもかかわらず活動制限や行動範囲の縮小という状況を引き起こし，身体機能低下やQOL（生活の質）低下を招くことから転倒そのものよりも大きな問題として指摘されている．本研究の目的は，日本の高齢者における転倒恐怖感の関連要因を探るために，研究Ⅰで転倒恐怖感の調査項目に和式生活関連活動を加えて自己の能力予測である自己効力感（以下，活動自己効力感）と転倒恐怖感との関連を抽出し，研究Ⅱで転倒恐怖感に関連する身体機能的転倒要因と転倒恐怖感によって制限され活動自己効力感に影響を与えている因子構造を検討した．

研究Ⅰでは地域高齢者 31 名（平均年齢 75.7±8.3 歳）を対象として転倒恐怖感あり群と転倒恐怖感なし群の２群に分けて活動自己効力感を比較した結果，活動自己効力感で群間差のあったものは，“階段を昇り降りする”，“床の拭き掃除を行う”，“電話にすぐに対応する”であった．研究Ⅱでは地域高齢者 54 名（平均年齢 73.8±7.8 歳）を対象として研究Ⅰで関連が認められた活動要素を客観的指標で検証した．活動自己効力感と転倒恐怖感に有意な相関が認められ，側方上肢動作時間，下方上肢動作時間，TUG，段差昇降時間，床からの立ち上がり時間，床への座り時間，健康度自己評価に有意な相関が認められた．活動自己効力感を目的変数，相関因子を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）結果から転倒恐怖感に影響を与えている因子は，TUG と下方上肢動作時間であった．これらの動作は和式生活では不可欠な動作であり，転倒恐怖感に特有な動作であることが示唆された．転倒恐怖感の評価や介入では複合的移動能力に加え、立位での垂直下方向に対する上肢動作反応を考慮する必要性があるといえる．

本研究ではまず転倒恐怖感と自己効力感との関連を抽出し、さらに転倒恐怖感に関連する身体機能的転倒要因と活動自己効力感に影響を与えている因子構造を検討し、予防リハビリの領域では重要な結論が出された。以上より，本研究は博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。